

## 和裁研究室の寄贈資料－打掛あれこれ－

正 地 里 江\*

はじめに

平成30年度特別展「きもの、乙女たちのハレ姿」では、本学短大和裁研究室で収集された和服類の中から、本学教員や卒業生、本学と縁のあった方々から寄贈された打掛や留袖、振袖、祝着などの晴れ着を中心に展示した。平成29年度特別展「きもの、いとをかし」に続いての特別展となった。

短大和裁研究室で資料収集の中心となったのは故・岡野和子先生で、本学の卒業生であり、昭和25年に短大が開学した時から和裁研究室に勤務され、長年、被服教育に携わられた。岡野先生の専門分野が日本の服飾や風俗であったこともあって、生活文化博物館の博物館設置準備委員もされており、生活文化博物館と和裁研究室は開設前から関わりがあった。開設時から和裁研究資料も博物館資料とされ、博物館の収蔵品カードと同じ書式で和裁研究資料の資料カードが作られていた。和裁研究資料の資料は10項目に分類され、その件数は500件ほどになるが、資料カード作成後に寄贈された資料については、整理が追いつかず、通し番号を付けただけで資料カードが作られていない未整理のものが250件ほどある。そのため、和裁研究室全体では750件以上の資料を持っていた（複数で1件と整理されている資料もあるため、1点ずつ数えて点数にすると、その数はもっと増えることになる）。そのうち、前回の特別展では、資料1作品類、資料4紋、資料5布地・色標本、資料9寄贈品（女物）から、今

回の特別展では資料9寄贈品（女物）、資料10寄贈品（子供物）と未整理の寄贈品の中から選び、合わせて200点弱を展示資料とした。とはいえ、展示できたものは全体からすると半分以上ということになる。

### 1. 資料の記録について

今回の展示資料には、未整理のため詳細な資料カードのない寄贈品がいくつかあったので、改めて寸法を計測したり、色や柄の名称を確認したりする作業が必要となった。寸法を測ることは難しい作業ではないが、経年変化での歪みや長年の収納での畳み皺等があって計測しにくいものもあった。また、色や柄の名称を決める作業は思った以上に難しく、特に柄については単純に「草花模様」としてしまったものもあった。

すでに資料カードがあるものについては、その情報を転記して展示目録に掲載したのであるが、作業を進めていくうちに、若干ではあるが間違いがあることに気がついた。単純な誤記の場合もあったが、似たような資料の情報を取り違えていたものもあり、本来は資料カードの情報が正しくないということはあってはならないので、今回それに気づくことが出来たのは良かった点といえる。しかし、展示が終了した後になってから間違いに気づいた資料があるので、ここに記して訂正し、お詫び申し上げます。展示目録の資料番号1.打掛と2.掛下の寸法の間違いで、正しくは1.打掛が丈155×衿65×袖丈84（cm）、2.掛下が丈150×衿65×袖丈83（cm）となる。打掛と掛下の寸法が入れ替わっていたという間違いで、気がついてから再度計測し、確認したのであるが、実はそもそも資料カードの情報が逆に記録されていたのである。この2点は、同じ方から寄贈された婚礼衣裳一式で、外側に羽織って着る1.打掛の方が、中に着る2.掛下よりも長くなくもおかしいし、展示目録の写真を見ても1.打掛の方が2.掛下より若干長いのが分かる。にも関わらず、資料カードの情報をそのまま転記し、その情報を正しいと疑わず、校正の際にも元の資料カードの情報との相違にしか気を付けなかったために起きた間違いである。前回の展示で寄贈資料に関する情報が不足している点が多

#### 〔和裁研究資料の資料カード10項目〕

資料1：作品類（A 人間国宝、B～D 伝統工芸品）

資料2：時代衣装（A 実物、B 雛形）

資料3：仕事着

資料4：紋・足袋類

資料5：布地・色標本

資料6：16ミリ・スライド

資料7：民族衣装

資料8：寄贈品（男物）

資料9：寄贈品（女物：A 長着、B 帯、C 羽織、  
D コート、E 下着、F その他）

資料10：寄贈品（子供物：A 男児、B 女児）

\*正地 里江（しょうじ さとえ）平成30年度現代生活学部助手

く、資料に関する様々なことを記録しておく大切さを痛感したのであるが、今回は資料カードの情報の正確さの重要性を痛感させられた。資料整理は膨大な時間と手間のかかる作業であるが、未整理の寄贈品がまだたくさんあるので、今後は細心の注意を払って作業を進めていきたい。

## 2. 打掛あれこれ

今回の展示では4点の打掛を展示した。

1点目は展示目録の表紙にも使われた資料番号11の江戸時代後期の打掛で、4点の中では一番古く、寄贈年は昭和24年で和裁研究室の寄贈品の中では最も古い。茜緋色地に牡丹と唐獅子の柄が刺繍されていて、とても豪華な打掛である。紋も、家紋ではなく洒落紋で、10cmほどの枝牡丹が刺繍されている。(写真1)

婚礼用の衣裳の色には、現在でも白が多く用いられているが、平安時代から神聖な色として婚礼時の衣裳に白が用いられ、室町時代にはすべて白い「白無垢」が着用されるようになったといわれている。当時から今日に至るまで白無垢は最も格の高い婚礼衣裳とされており、白以外の色打掛は、元々は白無垢よりも格としては下の装いとされていた。しかし、江戸時代に入って豪商や裕福な町家の娘たちの間で着られるようになり、次第に一般にも婚礼の礼服として普及したといわれ、現代では色打掛も白無垢と同等な格の打掛とされている。この茜緋色地の打掛は、江戸時代後期といっても具体的な着用年は分からないが、当時は婚礼を終えたあと「色直し（お色直し）」で白無垢から色物に着替えたということから、この打掛はお色直し用ではないかと思われる。刺繍されている牡丹と唐獅子の柄も、その取り合わせが良い組み合わせという意味や獅子の魔除けという意味からは婚礼衣裳に用いてもおかしくはないが、若い娘が着るであろう婚礼衣裳にしては可愛らしさよりも勇壮な派手さが感じられ、大きな枝牡丹の洒落紋からも儀式を重視しているというより

はオシャレさを伺うことができる。また、当時は現代のように花嫁本人の意見だけで婚礼衣裳を決められるとは思えないので、裕福な家であるだけでなく、とてもお洒落でハイセンスな風流人が、婚礼を楽しんで作らせたのではないかと想像が膨らむ打掛である。

2点目は次に古い資料番号10の大正初期の打掛で、白地に吉祥模様が刺繍された華やかで可愛い打掛である。刺繍されている柄を吉祥模様とまとめて表現してあったが、松竹梅、鶴亀、花車などが刺繍や染めで表されていて、一目見ただけで縁起のよさが伝わってくる。また、裾の裏に紅絹（もみ）が使われていて、紅白の裾にもおめでたさを感じられる。(写真2)

3点目は資料番号1の大正時代の打掛であるが、これは嫁入り支度の品々が書かれた「調度品控綴」が一緒に寄贈されていて、その表紙の記載から大正10年1月15日という具体的な日付まで分かっている唯一の資料である。一見は白にも見えるが、実際は淡い水色地なので色打掛になる。「調度品控綴」には用意された様々な品物と数が書かれていて、とても興味深い資料である。くずし字で書かれているため読めない部分も多いが、いずれ翻刻してみたいと思う。

4点目は資料番号3の昭和17年着用の打掛で、4点の中では一番新しいが、すでに70年以上前のものになる。白地で紗綾形の地模様に家紋が刺繍されているだけで、柄はないので白無垢といえなくもないが、裾の裏に紅絹が用いられているので、厳密には白の打掛なるかもしれない。この打掛の身丈（打掛の長さ）は、4点の中で一番長い。打掛は裾を引いて羽織って身につけるので、丈が長いのは当然なのだが、4点を比較してみると、衿（首の中心から腕のくるぶしまで）の寸法はほとんど同じなので、着用者の身長はほぼ同じくらいの高さだったのではないかと推測できるのだ

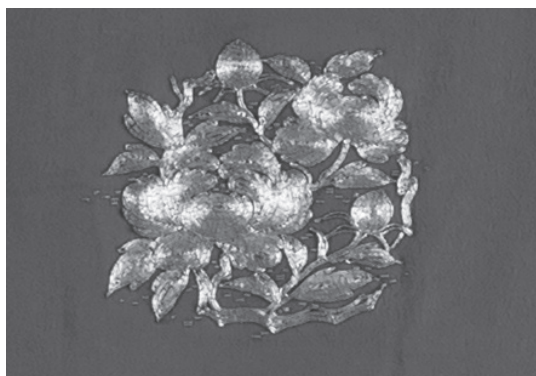


写真1 枝牡丹の洒落紋



写真2 吉祥模様の打掛（部分）

が、この打掛はかなり裾を引いた状態になったのではないかと思う。しかも、その下に着る掛下は本襲（同じ形のものを二枚重ねて着る）になっており、展示する際にもなかなかの重さがあった。丈が長いと豪華にもなり、格が高くなったりもするが、この婚礼衣裳を着ている本人は相当重く、大変だっただろう。

今回、打掛を展示するにあたって、普段なかなか目にすることのないものなので、前回の特別展で麻と絹と木綿に直接触れることができるコーナーを設けたように、今回は打掛を用意して、見学に来た方に気軽に羽織ってもらうコーナーを設けてみたいと考えた。手軽に入手できるのではないかと思い、ネット通販で探してみたのだが、レンタル品の払い下げなどで販売されてはいても、色や柄、傷や汚れの状態などの面から気に入るものを選ぶことができず、また、素材としては比較的安価なポリエステルではなく正絹（絹100%）となると値段も高くなり、予算の面の問題もあって、断念せざるを得なかった。婚礼衣裳というのは、やはり簡単に選んで入手するようなものではなく、まさに一生に一度の「晴れ着」なのだと実感させられた。そのような貴重な打掛をご寄贈いただけたことに感謝し、これからも大切に保管して、博物館資料として活かしていきたい。

#### おわりに

今回、多くの和服を展示するにあたり、できるだけ全体の模様がみられるように、また、柄のある表側だけでなく、裏側も見えるように展示したいと考えた。自分自身が展示を見る際に、裏側も見てみたいという欲求を抱くことがあるからである。さらに、貴重な資料とはいえ、できるだけガラス越しにならず、直に見られるようにしたいと考えた。しかし、和服を広げる

にはスペースが必要で、壁に沿った展示では数が限られることや、直にとはいえ大切な資料であるから、適当に広げるわけにもいかないもので、床より少し上がった舞台のような設置場所を作ってもらった。そこに、和服をかけた衣桁を角度をつけて斜めに並べることで、できる限り多くの和服を、表も裏も見えるように展示することができた。他にも、羽織の展示では、羽裏（羽織の裏地）の柄の面白さを見せるために、あえて羽裏が見えるように展示したり、小さくて見にくい家紋は紋典からコピーしてパネルを作って展示したりするなど、多少なりとも工夫して展示を行った。舞台のような設置場所を設営する作業は、博物館関係者の方のお手を煩わせたが、おかげで満足のいく展示をすることができた。ここに、改めて感謝申し上げます。

2度の特別展で、合わせて200点弱の和裁研究室の資料を展示することができたが、これらの資料は、ただ収蔵しているだけではもったいない。まだまだ展示していない資料があるので、機会をみて、少しずつでもお披露目していきたい。また、未整理の寄贈品について資料カードの作成を進めるとともに、すでに資料カードがある資料についても、研究室独自のナンバリングになっているので、博物館資料として扱うための整理と情報の再確認を行い、和裁研究室の歴史の詰まった資料をこれからも活かし、今後に繋げていきたい。

なお、和裁研究室の名称は、平成23年に東京家政学院短期大学生活科学科が廃止になるまでに「被服構成（平面）研究室」、「被服構成学平面研究室」、「被服科学研究室」と研究室名を変更しているが、今回は、一番長く、そして多くの方に使われた「和裁研究室」という名称で統一させていただいた。